

(一) 全国大学史資料協議会

一九九八年度総会ならびに全国研究会

全国大学史資料協議会としては三回目となる総会ならびに全国研究会が一九九八年九月三十日から十月二日まで開催された。毎年東西が交代で主催している総会は、今年度は西日本部会の担当となり、四国松山の愛媛大学を主会場に行なわれ、東西あわせて三八大学五四人、個人会員一三人の計六七名の参加をみた。

総会に先立って東西合同の役員会が開かれた。まず協議会全体の会長校が選出された。会長校の任期は二年で、今年はその交代の年に当たる。過去二年間は東日本部会の会長校が協議会の会長を務めていたので、今年度からは西日本部会の会長校がその任を負う。次に今年度行なう共同事業・ケニス スミス氏 (Mr. Kenneth Smith, B.A.) の講演記録の作成と協議会英文名称変更について話し合い、総会に諮ることになった。

愛媛大学法文学部四階大講義室において総会と第一日目の研究会が行なわれた。会場提供校・愛媛大学学長、鮎川恭三先生の挨拶のあと、総会が始まった。議長・副議長の選出に続いて、役員会審議の報告が前会長校・現副会長校、神奈川大学資料編集室の澤木武美氏よりなされ、満場一致で承認された。新会長校・桃山学院学院年史委員会の西口 忠氏は、挨拶の中でこれまでの協議会の発展を振り返り、昨年の講師・スミス氏のメッセージを紹介された。東西の各事務局校から今年度の活動計画の報告があり、総会は閉会した。



分科会のコマ

引き続き全国研究会講演会に移った。講師の島津豊幸氏は現在、松山大学法学部非常勤講師でいらつしやるが、旧制松山高等学校の最後の卒業生で日本近代史専攻ということもあって、様々な機会に旧制松山高等学校を紹介する活動をなさっている。「旧制松山高等学校と地域社会」という演題で、これまでのご自身の活動を中心に学校を守るための同窓生の努力や学校存立のためには物心両面での地域の協力が必要であることなど、学校と地域との関わりについて語られた。簡単な質疑応答のあと、講演会は終了した。研修懇親会は愛媛共済会館に会場を移して持たれた。協議会としては三回目であるが、それ以前から合同で研究会を持ち、顔を合わせていたこともあって、会が始まるとすぐに挨拶や情報交換のための人の輪がいくつもできた。途中で、新たに会員となった学校や人事異動等で交代された担当者の自己紹介があった。

二日目も愛媛大学で行なわれた。午前は愛媛大学教育学部教授・山本久雄先生に「田川事件顛末」と題する報告をいただいた。先生はまず、愛媛大学で起こったこの事件がどういうものであったのか、事件の経緯を大学をとりまく当時の状況と共に説明された。この事件は、当事者・関係者が存命中であり、取り上げにくい問題ではあるが、新制地方国立大学の抱えていた地域との関係を浮かび上がらせている。この「構造的状況」が事件の背後で大きな影響を与えていた、ということであった。質疑応答では、関係者が存命中であったり、まだ歴史として過去のものとなっていない出来事の年史での取り扱い方について質問があり、感情を入れずに事実関係だけを慎重に扱うように考えているとの回答があった。

このあと午後に行なわれる分科会の主旨説明が司会・関西大学出版部出版課の熊博毅氏よりなされ、立命館百年史編纂室の西川賢氏が分科会について発題をされた。分科会を行なうことは協議会としても初の試みである。今回の分科会の目標は経験交流であるから、発題は討議テーマの主なものについて討議の方向性を示すためのものであった。

昼食をはさんで分科会に入った。今回は三つの分科会が設定された。第一分科会は「年史編纂に関する分科会」で司会者は桃山学院の西口氏、記録者は学習院大学史料館の桑尾光太郎氏。第二分科会は「年史資料の収集・保存に関する分科会」で司会者は中央大学史編纂課の松崎 彰氏、記録者は筆者。第三分科会は「年史資料の公開・展示に関する分科会」で司会者は関西大学の熊氏、記録者は福岡大学大学史資料室の後藤正明氏。分科会での話し合いのあと、それぞれの記録者から分科会の報告がなされた。第一分科会では編纂にあたっての体制作り、原稿をいかにスムーズに集めるか、また、どのような刊行物を出すかということと編纂を振り返っての反省点やアドバイスを話し合われた。

第二分科会は年史資料の収集・保存という史資料室の基本的機能について考えるものであったため、三分科会中最も多数の三三名の参加者を見た。発題にもあった如く経験交流を目標としているため参加者全員の自己紹介と現状報告、問題点の提起が行なわれたが、多人数ということもあり、予定時間内に終えることができなかった。結局、問題点提起のみで具体的な話し合いにまで発展し得ず、司会者の提案によりワーキンググループを作り、そこで問題点を整理して来年度の全国研究会で報告を行ない審議を深めることになった。三つのテーマに分け、それぞれ担当者が決められた。(一)史資料の調査・収集をめぐる諸問題(担当者は明治大学歴史編纂事務室の鈴木秀幸氏)(二)史資料整理とコンピュータ利用の可能性をめぐる諸問題(担当者は関西大学事業局出版部出版課の福井智佳子氏)(三)組織的な史資料保存の体制に関する諸問題(担当者は大阪商業大学谷岡学園広報課の新井芳則氏)

第三分科会では各大学の現状が報告され、展示については場所の問題が、また情報公開については、収集との関係もあるが、個人情報への取り扱い方が話し合われた。

三日目は松山東雲学園を見学した。まず松山東雲学園百周年記念館四階研究室で「私学と周年史」と題する報告を、松山東雲学園理事の西村 拓先生と松山東雲学園高等学校社会科教諭の古谷直旗先生より伺った。西村先生は年史を作る上での方針について語られた。まず私学における百年史の意味を考え、その認識したところに従って創立の精神と教育理念を明確化し、継承していくことを目的に人中心に百年史作りをこころがけたとのこと。古谷先生からは学園史略年表についてのお話があった。年表を作るにあたって先生の取られた方法は一日一カードということであった。歴史を書くということは学校をどのように考えるかということ

であり、学校を地域社会と考えると具体的に記録し、確実にデータを蓄積するために考え出されたものである。一日一カードを始めから教務日誌、生徒会日誌の書き方が変わったという。記入者が記録というものを意識するようになった。これを元に作られた年表は総頁数一、二三四頁の冊子となった。質疑応答のあと、展示を見学した。

松山東雲学園は神戸女学院と同じ米国伝道会系のミッションスクールで、神戸女学院元中高部長の故二宮源兵先生が松山東雲短期大学の学長を、また故岡本道雄前院長が松山東雲女子大学の学長を務められ、今また別府恵子教授が岡本先生の後任として赴任されたように神戸女学院からいらした先生方もあり、両校の関係は深い。

今回は協議会の見学会のため百周年記念館展示室に特別に史料を出して下さった。展示室入口のホールの一方の隅には作りつけのガラスケースが置かれており、歴代校長・学長の写真をはじめ史料が展示されていた。展示室内には年表のために作成した一日一カードのファイルやこれまでに発行した冊子類などが四方の壁ぎわのテーブルの上に並べられていた。展示室の中では年表の元になった一日一カードのファイルを手に取って感想を述べあう人の輪や壁ぎわの史料を熱心にのぞきこむ人の列ができていた。松山東雲学園では創立以来の史料が残っていたので年史編集のための史料に困ることはなかったが、正規の学園史料室を持っていないため、このままでは史料散逸の危険がある。そこで今後、四国のキリスト教女子教育研究センターとしての役割も果たせる史料室の設置を目指しているとのことであった。見学終了をもって全国研究会は閉会した。

今回の全国研究会は初の試みとして分科会に分かれて会員各校の交流をはかったが、この経験が次年度以降の研究会に生かされるものであることを願っている。会場校・愛媛大学の皆様、とりわけ高瀬志保氏をはじめ、企画・運営のためにご尽力下さった役員校の皆様に、回を追う毎に充実していく協議会の活動を思い起こして改めて感謝の念を強くしている。

(佐伯裕加恵)